

石岡の重要文化財

令和4年11月

石岡小学校 5・6年児童

1 研究の動機

わたしたちは、ふるさと教室という行事を行っています。ふるさと教室とは、地域の方を講師として招き、石岡地区のことを学ぶ石岡小の伝統行事です。地域の方と交流する様々な行事でたくさんのお話を聞き、その中で不思議に思ったことや気になることがあったため、調べてみたいと思いました。

2 研究の方法

- ・インターネットで資料を探す。
- ・地域に詳しい方へのインタビューを行う。
- ・学校近辺の史跡を見学する。



3 研究の内容

(1) 十石堀について

十石堀は農民自らの発意と計画により、1669年に建設された用水施設であり用水路延長約15km、取水水門二か所最大取水量毎秒0.36m³、受益面積は78haである。

鉄筋コンクリート三面張り水路に改修されている区間もあるが、水源から約2kmの区間は、建設後350年経過した現在でも建設当時の姿のまま利用されている。

十石堀は、江戸時代（1669年）に建設され現在に至るまで維持管理されてきている。昭和57年に、維持管理と啓発を目的に協議会を設立し、エコツーリズムや地域学習会が開催された。

十石堀の歴史ばかりでなく、炭鉱跡や地質遺産を含めたエコツーリズムを行っており、地域観光資源としての役割を果たしている。小学生の校外学習、エコツーリズム等の参加者は令和元年度で273人に及ぶ。地域遺産を受け継ぐ次世代の育成が進んでいる。

平成31年1月に市の史跡指定、令和元年9月には世界かんがい遺産に登録された。この結果、アメリカ、カナダからの視察を受け入れた。



江戸初期の新田開発に大いに貢献し、今なおそのおいしい米の源として活用されている十石堀は、北側に大北川が流れ、南側に塩田川の流れるその間に挟まれた、標高50mから標高350mの東西に長い台地の上に疎水をおこし、当時から続けられている。

この十石堀は、江戸時代初期に、当時、領国経済の充実を積極的に推し進めた水戸藩と、天水に依存する米作りで、年々かんばつに悩まされていた農民願いが一致し、当時の松井村の庄屋が中心となり、成し遂げた快挙であり、21世紀の今も、この地域の水田には、なくてはならない疎水として、330年の歴史をものがたりながら、脈々と流れている。

(2) 石岡発電所について

石岡第一発電所は北茨城市にある水力発電所である。茨城県内で稼働中の水力発電所としては、中里発電所に次ぐ歴史をもち、施設全体が日本国の重要文化財に指定されている。

明治44年に竣工した水力発電所である。本発電所は、茨城県北茨城市に位置し、二級河川である大北川水系の本流から取水し発電している。

日立鉱山の施設拡充に伴う電力需要の増加に対応するため、久原鉱業所日立鉱山工作課長小平浪平および同課技師宮長平作を中心として建設が進められたもので、大正期の増設工事を経て現在の状態に整えられた。

石岡第二発電所は構成施設6か所が日本の登録有形文化財に登録されている。大正2年12月に竣工し、大正3年1月から運転が始まった水力発電所である。本発電所は茨城県北茨城市に位置し、茨城県で最大の二級河川である大北川水系の本流、大北川から取水し発電している。

(3) 炭鉱について

北茨城市は、常磐炭鉱の地として江戸時代からの歴史がある。北茨城市は炭鉱の町だった。中郷炭鉱を始め、市内の華川や関本などの地域で石炭が採掘された。常磐炭田と呼ばれたこの地域には、炭鉱労働者や多くの行商人らが行き交い、にぎわっていた。冬至の石岡小は、本校舎ができていなかったため、学校がいくつかに分かれていた。昭和20～42年は児童の人数が約1,200人ほどいたが、昭和46年ごろから減少した。

六抗区世話所の近くにスーパーや銭湯などがあり、生活するために便利だった。六抗区世話所の中に黒板のようなものがあった。そこで、炭鉱に働きに出る予定を確かめたということだ。六抗区世話所は、石岡小から見ると遠くに見えたが、実際に行ってみると意外に近かった。



4 研究のまとめ

石岡地区にある十石堀について調べたことで、世界かんがい遺産に登録されていることのすごさに気付きました。長い歴史の中で、建設されたままの姿で現在も残っている十石堀がこの地域になくてはならないものであることが改めてわかりました。

当時、石岡小に1,000人以上の児童が通っていたことから、炭鉱の歴史からこの地域がとてにぎわっていたことがわかりました。

大北川の周りには重要文化財に指定された第一発電所や十石堀親水公園など、名所がたくさん残っています。その近くにグランピング場のようなレジャー施設を整備するとさらに石岡地区に人が集まり、今後の地区の活性化につながるので、新たな観光スポットを設置してもよいと考えました。